

蠅とアンパン

(フクシマ詩編より)

小林守城

言語野に放射能の雨が降り
ためらうことが少なくなる

蠅がたかったアンパンなどは
不始末の結果だ

平然と当たり前に
美味しく頂くことにする

蠅もとまらぬ食べ物などは
選んではならない

蛆虫の湧いているのは
時によりけりだ

生死の境ならば まず
共滅を避けねばならない

思い出せばいいのか
かつての蠅を追い払いつつの食事

抵抗力や耐性をそなえ
微生物との共生の団らん
汗臭い労働は何処へ行った

思いだすまでもあるまい
今はその理屈は通用しない

閾値のない未知の行き先
被曝労働は微生物の経験にも
いのちの代償の記憶を残さない